

師・金子兜太 (二)

松本勇二

谷に鯉もみ合う夜の歓喜かな 『暗緑地誌』

二十のテレビにスタートダッシュの黒人ばかり 『ㄥ』

前衛と呼ばれた兜太ですが、この句集くらいから「衆」を意識し始めます。「衆の誌」を発表したのも当該句集発表二年後の一九七四年です。一句目は夜、谷で鯉がもみ合っていると書きながら、性的な読みをされる句でもあります。魚類の繁殖行動を描きながら「歓喜かな」と歌い上げることで鯉に限らない雰囲気を醸しているからでしょう。二句目は晩年多用した即興への初期作品とっております。テレビ売り場の多くの画面に流れるスタートダッシュの場面を誰もが一瞬にして浮かべることができます。兜太の厚みが増してくる時代です。

骨の鮭鴉もダケカンバも骨だ 『早春展墓』

髭のびててつぺん薄き自然かな 『狡童』

「旅」の章で、鮭の句が六句並ぶ最後の句です。北海道の旅の句ですが、何の銜いもなく言い切る兜太の強さをいつも思う一句です。インパクトの凄さを味わえばよい句と考えます。二句目は兜太自身を自虐的に書いてユーモア溢れる一句です。筆者も「てつぺん薄き」ですが、なかなかこうは書けません。

霧に白鳥白鳥に霧というべきか 『旅次抄録』

句集名通り旅の句で「白鳥・九重」と章立てされた中の一句です。よく色紙に揮毫され本人お気に入りの句でもあります。「松本、俳句は感覚だよ」とよく言っていたいただきましたが、この語順を思いつけるのが感覚であろうと思っております。

梅咲いて庭中に青鮫が来ている 『遊牧集』

遊牧のごとし十二輛編成列車 『ㄥ』

当句集を編むにあたって「毎日の暮らしのなかでできた句を選ぶこととした」と、あとがきにあります。その毎日の暮らしのなかで梅が咲いたことを契機に青

鮫が庭中に来た、と書いています。「これが先生の日常ですか」とツッコミたくなりますが、創造力を称えるしかありません。春が来た昂揚感が青鮫を現出させたと解釈しています。ご自宅を訪問した時に「この庭に青鮫がきたのか」と感心したのが昨日のことのようです。二句目は句集名となった句です。日常の電車にのりながら遊牧へ思いを飛ばす、豊かな詩精神を思うばかりです。

麒麟きりんの脚あしのごとき恵みよ夏の人 『詩經國風』

麦秋の夜は黒焦げ黒焦げあるな 『 』

「詩經國風」は、中国、周の時代に孔子によって編まれた極東最古の詩集です。これを「一茶のようにこの詩集を発想源とするのではなく、狙いは言葉にある。句づくりを通して言葉をしゃぶってみたかった。」とあとがきにあります。しゃぶるうちに口を突いて出たのが一句目で、読むたびに優雅な気持ちになります。二句目は「日本列島の東国秩父二一句」にあります。兜太自身がぶつぶつ呟いているような句で、このとぼけた感じに吸引力があります。

牛蛙ぐわぐわ鳴くよぐわぐわ 『皆之』

晝句ではこの句も有名です。「小兒的語彙であるオノマトペの愛用は、まずは山頭火由来で、重ねて一茶を学んだ成果である。」と井口時男著『金子兜太』（藤原書店）にあります。